

Title	慶應義塾大学グローバルCOE3拠点シンポジウム：(2008年11月28日、三田キャンパス北館ホール)
Sub Title	
Author	渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.7, (2009. 3) ,p.2- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000007-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学グローバル COE 3 拠点シンポジウム

(2008 年 11 月 28 日、三田キャンパス北館ホール)

現在、慶應義塾大学にはいくつかのグローバル COE 拠点が発足しているが、共通の関心とテーマを持つ、「論理と感性の先端的教育研究拠点」(社会学研究科)、「幹細胞医学のための教育研究拠点」(医学研究科)、「環境共生・安全システムデザインの先導拠点」(システムデザイン・マネジメント研究科)が社会学研究科特別招聘教授として来日した Michel Hofman 教授を囲んでのシンポジウムを11月28日に三田北館ホールで共催した。なお、このシンポジウムはすべて英語で運営された。

「論理と感性の先端的教育研究拠点」渡辺拠点リーダーによる Opening remark の後、M. Hofman 教授が“Human Brain Evolution: From Matter to Mind” というタイトルで講演を行った。ヒトの脳進化の特徴を概説し、とくに大脳灰白質よりも白質部分の増大が著しいことを述べ、情報処理の観点からの進化の特徴を述べた。さらに脳進化を促した要因として環境要因、社会的要因を取り上げて人間の知性がどのように進化したかを説明した。さらにヒトの脳の量的進化は文化的進化のはるか以前に停滞しており、道具使用や文化と脳の関係についても洞察を述べた。

ついで、医学研究科から北村研究員(総合医科学研究センター)が“Therapeutic strategy for spinal cord injury using hepatocyte growth factor; from rodent to primate” という講演を行った。これは hepatocyte growth factor を脊髄損傷部位にウイルスを使って導入し、損傷部位のファイバーや血管が部分的に修復され、行動評価スコアも上がったことを述べたもので、トランスレーショナル・サイエンスの成果である。また、同じ医学研究科の藤吉研究員(総合医科学研究センター)が“Analysis of the spinal cord injury using diffusion MR imaging?: from DTT to q-space imaging ?” という講演を行い、マーマセットで、標準化した手続きで脊髄損傷を作り出し、最新の拡散テンソルを用いて損傷部位、治癒過程を生体で可視化するという話を美しい画像とともに説明し、次世代イメージングの展望を述べた。

昼食をはさんで午後からは早稲田大学国際教養学院の内田教授が“Evolution of the brain and human way of life” というタイトルで講演し、生物人類学の立場からヒトの脳とヒトとしての行動の関係を論じた。ついで社会学研究科の伊澤准教授が“Human brains and avian brains” として、ヒトの脳進化とは異なる進化を遂げた鳥類の脳進化を概説し、特に鳥類の中で大型脳を持つカラスについて、グローバル COE での新しい成果を含めてその構造と機能を説明した。

最後は本拠点の国内連携拠点である理化学研究所脳神経総合研究センターの入来博士が“Neurobiology of Primates' Intellectual Evolution” という講演を行った。この講演では理化学研究所でのサルは道具使用の豊富なデータを紹介し、効果器の延長としての

道具のみならず、感覚器の延長としての道具使用を紹介し、道具使用と自己意識さらには言語の進化にいたる壮大な俯瞰を行った。

これらの講演の後、システムデザイン・マネジメント研究科の前野教授の司会で全体討論が行われた。前野教授は我が国におけるロボテックスの第一人者であるばかりでなく、意識についてもユニークな議論を展開していることでもよく知られており、この全体討論でも意識を中心とする議論が活発に行われた。

シンポジウム終了後、東館交流スペースで懇親会が行われたが、オランダ出身である Hofman 教授は壁に掛けられた咸臨丸の設計図にいち早く注目し、造船場所(Kinderdijk)がどこにあるかを説明し、また後日その場所の写真(掲載図版〔上〕)を送ってこられた。

今後とも、このような学内での研究科を超えた交流を深め、総合大学としての利点を生かした研究を展開していきたい。

(渡辺 茂)

